

飢饉供養塔からみた北奥近世社会の一面

関 根 達 人

はじめに

近年、近世考古学の分野では墓標への関心が高まり、大規模な悉皆調査に基づき、江戸時代の人々の生と死に関連する議論が盛んに行われるようになった。近世墓標は、文化財としての認識こそ確立されてはいないが、いまや近世史を語る上で不可欠な歴史資料と見なされつつある。墓標以外の石造物に対する調査は、各地方毎に進められてはきたが、いまだ近世史研究の組上に乗せられる状況には到っていない。江戸時代には、記念碑的な意味合いの様々な石造物が多数造立されているが、それらは紙と石という素材の違いこそあれ、文献史料と同様、歴史的事象を記録した重要な歴史資料である。

一方、文献史料を中心とした近世以降の歴史学の分野では、近年、とりわけ一九九五年の阪神・淡路大震災以降、地震・噴火・津波・大火・飢饉といった災害史に

対する関心が高まりを見せている。津波は発生する地域が限定されるため、津波碑の研究も進んでいる（首藤・古山ほか二〇〇三、千葉県立房総博物館二〇〇三、羽鳥一九七五a・b、一九七六、一九七八a・b、一九七九a・b、一九八〇、一九八一）。一方、飢饉供養塔は全国各地に多数存在するが、いまだその実態が明らかになっていない。北奥の近世史を語る上で、飢饉は不可避な重要な問題であり、飢饉供養塔の調査・研究の必要性は一段と高い。

筆者は、平成一六年度から基盤研究C2「供養塔の基礎的調査に基づく飢饉と近世社会システムの研究」（課題番号16220459）という課題で科学研究費を受け、津軽と下北・南部地方の飢饉供養塔に関する報告書を刊行した（関根二〇〇四、関根編二〇〇五）。本稿は、飢饉供養塔から垣間見られる北奥近世社会の諸相を論じる。

一 津軽領における飢饉供養塔の概要

これまでに旧弘前藩領ならびに旧黒石領において確認した飢饉供養塔は、補足調査分を含め、一〇四基である。飢饉毎の内訳は、元禄の飢饉に関するもの二基、天明の飢饉に関するもの九八基、天保の飢饉に関するもの四基となる（第1～4表）。同様に、南部・下北地方では、宝暦の飢饉に関するもの一基、天明の飢饉に関するもの一九基、天保の飢饉に関するもの四基の合計二四基の飢饉供養塔を確認したが、飢饉供養塔とは断定できないがその可能性のあるものを含めても総数四三基に過ぎない。また、既に飢饉供養塔の集積がなされている宮城県の場合、飢饉在銘供養碑として九二基が報告されているが（三原一九六二）、このうち飢饉供養塔と断定できるものは八一基で、内訳は、宝暦の飢饉に関するもの一基、天明の飢饉に関するもの三九基、天保の飢饉に関するもの四一基となる。今後各地で調査が進展した場合でも、東北地方の中で、ひいては全国的にみても、津軽地方が飢饉供養塔の造立が極めて盛んな地域である点は変わらないであろう。

調査報告書『下北・南部地方の飢饉供養塔 補遺津軽の飢饉供養塔』で既に指摘したように、津軽領における飢饉供養塔の特徴は、第一に天明の飢饉に関するものの

割合が非常に高いことであり、第二に村を単位とする地域共同体により造立された供養塔が多いこと、第三に自然石に銘文を刻んだものが多数を占めている点にある。

第一の特徴については、天明の飢饉の発生後、一三回忌・一七回忌・二三回忌・二七回忌・三三回忌・五〇回忌に関して回忌を明記した供養塔が造営されており、一般に吊い上げとされる五〇回忌に当たる天保二（四一八三一）（三三）年には、二七基もの飢饉供養塔が営まれるなど、ある種「流行」の観さえ見受けられる。

第二の特徴については、碑文から造立者が判明する供養塔八七基のうち、半数近い四〇基が村や町といった地域共同体名で建てられている点を指す。下北・南部地方の場合、飢饉供養塔と断定でき、なおかつ造立者を碑文から特定できるものは一四基しかないが、このうち町や村の名で建てられたものは僅か二基のみである。宮城県内の場合、飢饉供養塔と断定できる在銘供養碑のうち、造立者が特定できるものは六三基で、うち町や村の名で建てられたのは一一基に止まり、多くの供養塔は複数の個人名で建てられている。

第三の特徴は、飢饉供養塔の形状に関するものであるが、自然石の占める比率は、津軽地方で約八割、下北・南部地方で約三割、宮城県内で四割強となっている。

第1表 津軽の飢饉供養塔一覧(1)

①元禄の飢饉

No	名称	所在地	藩政区画	造立年月日	造立者	備考
8	旧蓮華寺 (現三内霊園)	原位置 青森市本町蓮華寺	青森町	1707年 7月13日	施主豊田宗治 勸 進蓮華寺八世日考	自然石 題目 経塚
62	専修寺 1	弘前市東和徳町 8-4	和徳組和徳村	1717年 8月27日	個人7名	笠塔婆型 題目

②天明の飢饉

No	名称	所在地	藩政区画	造立年月日	造立者	備考
1	楽宝寺	蓬田村広瀬坂本 870	後潟組広瀬村	1828年 4月15日	伊八(世話人) 貞安(勸進僧)	自然石 キリーク
2	日光院墓地前	平内町小湊赤明 堂26	黒石領小湊村	1787年 8月	東福寺11代住職	丘状頭角柱 経塚
3	新富町 1	金木町金木新富 町	金木組金木村	1831年	南臺寺	自然石
4	新富町 2	金木町金木新富 町	金木組金木村	1831年 7月	不明	自然石
5	金木駅前 1	金木町金木駅 ホ一ム南東	金木組金木村	1831年	南臺寺	自然石
6	金木駅前 2	金木町金木駅 ホ一ム南東	金木組金木村	1791年 6月1日	不明	自然石 円相
9	田町	木造町田町 共同墓地内	広須組木作村	不明	不明	自然石
10	釣町沢	鯨ヶ沢町釣町沢	赤石組釣町村	1809年 6月15日	吉田源右衛門 (三国屋)	自然石 キリーク
11	舞戸地藏堂	鯨ヶ沢町舞戸袋町	赤石組舞戸村	1832年 9月1日	不明	丘状頭角柱 名号
12	鶴ヶ岡	五所川原市鶴ヶ岡 川袋共同墓地内	広田組鶴ヶ岡村	1832年 4月	講中	自然石 円相 名号
13	湊	五所川原市湊船越 共同墓地内	広田組湊村	1816年 2月	湊村・半田村・姥 菰村	自然石 円相 彼岸中日
14	法永寺	五所川原市末広町	俵元新田組末広村	1805年	法輪山妙経寺住 職日宣	自然石 題目 「村内安全」
15	持子沢	五所川原市持子沢 笠野前共同墓地内	飯詰組持龍沢村	1831年 3月	持龍沢村講中善 心坊(勸進)	丘状頭角柱 「百九拾六人」
16	高野	五所川原市高野 柳田	飯詰組高野村	1815年 7月	高野村中	尖頭角柱
17	善龍庵	鶴田町胡桃館 善龍庵地蔵堂	赤田組胡桃館村	1832年 3月	胡桃館村中	自然石 念仏塔
18	境	鶴田町境宮内 共同墓地内	赤田組境村	1832年 2月	境村・前瀬村・五 條野目村	自然石 名号 陽刻地藏立像
19	五幾形	板柳町五幾形飯田 共同墓地	赤田組五幾形村	1832年 2月	五幾形村中	自然石 名号
20	龍淵寺	板柳町板柳土井	赤田組板屋野木村	1806年 2月3日	板屋野木村中	自然石
21	王余魚沢	浪岡町王余魚沢 共同墓地内	浪岡組王余魚沢村	1824年 8月	王余沢村 個人13名	自然石
22	五本松	浪岡町五本松木 共同墓地内	浪岡組五本松村	1830年	五本松村中	自然石 久右衛門 ・久助先祖供養
23	薬王院	浪岡町女鹿沢	増館組女鹿沢村	1790年 3月	寛左衛門	自然石 円相 蓮華
24	増館	浪岡町増館 共同墓地内	増館組増館村	1832年 4月22日	増館村中 個人6名	丘状頭角柱 名号

第2表 津軽の飢饉供養塔一覧(2)

No	名称	所在地	藩政区画	造立年月日	造立者	備考
25	智園寺	藤崎町中野目早稲田東115	常磐組中野目村	1831年 2月21日	中野目村・ 五林西村中	自然石
26	飛内	黒石市飛内 共同墓地内	黒石領飛内村	1806年 4月4日	飛内村中	自然石
27	黒石	黒石市黒石133 西側	黒石城下元町	1816年 7月17日	元町講中 個人6名	自然石 題目
28	来迎寺	黒石市京町寺町 11	黒石城下寺町	不明	来迎寺十九世良 得	自然石 キリーク
29	石名坂	黒石市石名坂村 刈西共同墓地内	黒石領石名坂村	1796年 7月	佐藤三郎右衛門	自然石
30	東家墓地	黒石市上十川北原	浪岡組上十川村	1816年 2月	上十川村中	自然石を一部 加工 円相
31	西馬場尻	黒石市西馬場尻 桶村共同墓地内	田舎館組西馬場尻村	1806年 2月2日	種市久六(世話 人)	自然石 六十六 部廻国納経塔
32	追子野木宮崎	黒石市追子野木 2-213-1	猿賀組追子野木村	1809年11月	黒石妙経寺日宣	自然石 題目 道標
33	追子野木柳川	黒石市追子野木2 共同墓地内	猿賀組追子野木村	1806年 3月	追子野木村題 目講中18名	自然石 題目
34	川部	田舎館村川部富岡	藤崎組川部村	1806年 4月8日	個人12名	自然石 題目
35	前田屋敷	田舎館村前田屋 敷南一本柳	藤崎組前田屋敷村	1796年 2月16日	前田屋敷村中	自然石 キリーク・バク・サ
36	堂野前	田舎館村堂野前 種井共同墓地内	田舎館組堂野前村	1806年 4月5日	不明	自然石
37	堂野前新町	田舎館村堂野前種 井新町公民館前	田舎館組堂野前村	1806年 6月23日	堂野前村中	自然石
38	垂柳	田舎館村垂柳丁伝 共同墓地	田舎館組垂柳村	1809年 2月	不明	自然石 円相
39	八反田	田舎館村八反田一 本木共同墓地内	田舎館組八反田村	1831年 3月13日	個人3名	自然石 日蓮 五五〇遠忌碑
40	畑中	田舎館村畑中上 野畑中会館	田舎館組畑中村	1831年 3月	畑中講中	自然石 日蓮 五五〇遠忌碑
41	豊蒔	田舎館村豊蒔南 前田共同墓地内	田舎館組豊蒔村	1786年 7月	不明	自然石
42	長田	尾上町長田元村 共同墓地内	大光寺組長田村	1832年 4月15日	長田村中	自然石
43	大石神社 (下宮)	弘前市大森	高杉組大森村	1806年 3月17日	大森村・貝沢村 個人13名	自然石
44	栖木	弘前市栖木 共同墓地内	高杉組栖野木村	1785年 2月7日	小山内氏	丘状頭角柱
45	鬼沢龍味庵	弘前市鬼沢	高杉組鬼沢村	1789年 7月15日	不明	自然石
46	感應寺	弘前市独孤山辺 101	高杉組独孤村	不明	不明	自然石 題目
47	宮館	弘前市宮館房崎 共同墓地内	高杉組宮館村	1833年 5月10日	中別所村 長兵衛	自然石 「先祖 代々…」
48	青女子	弘前市青女子桜刈 共同墓地	藤代組青女子村	1830年	青女子村講中	自然石 講中
49	三世寺	弘前市三世寺鳴瀬 共同墓地	藤代組三世寺村	1832年 4月8日	不明	自然石 名号
50	船水	弘前市船水勝浦	藤代組船水村	1832年	船水村中	自然石 円相
51	浜の町延命地藏尊	弘前市浜の町東 1丁目	弘前城下浜/町	1832年 4月8日	不明	自然石 円相 名号 蓮華
52	専求院 1	弘前市新町249	弘前城下新町	1790年 4月8日	江戸町講中 個人16名	自然石 蓮華
53	専求院 2	弘前市新町249	弘前城下新町	1830年 3月15日	連中	自然石 円相

第3表 津軽の飢饉供養塔一覧(3)

No	名称	所在地	藩政区画	造立年月日	造立者	備考
55	長勝寺 1	弘前市西茂森町 1-23-8	弘前城下茂森町	1832年 6月16日	長勝寺三十三 世祖山仙宗	丘状頭角柱
56	長勝寺 2	弘前市西茂森町 1-23-8	弘前城下茂森町	1787年 6月6日	長勝寺二十五 世無外了禅	丘状頭角柱
57	山観普門院 1	弘前市西茂森町 2-17-4	弘前城下茂森町	1785年 5月18日	派町 個人13名	自然石 白八鳥
58	山観普門院 2	弘前市西茂森町 2-17-4	弘前城下茂森町	1815年 7月	願主三浦勘兵衛 他個人多数	自然石 蓮華
59	最勝院 (旧大門寺)	弘前市銅屋町63	弘前城下銅屋町	1807年 4月8日	施主桶屋町工藤仁 八 白沢勘右衛門	角柱型 アーチク
60	本行寺(1)	弘前市新寺町92	弘前城下新寺町	1831年 5月13日	十三日構中ならび に亀岡佐八衛門	丘状頭角柱
61	樹木	弘前市樹木1丁目	和徳組樹木村	1820年 8月26日	樹木村中	自然石 円相 蓮華
64	小沢	弘前市小沢広野 共同墓地内	和徳組小沢村	1816年 2月15日	小沢村沢目中	自然石 円相 蓮 華 縁刻地藏二体
65	下湯口	弘前市下湯口 共同墓地内	駒越組下湯口村	1795年11月	悪戸村・下湯口村・ 唐内坂村中個人9名	自然石 円相
66	国吉	弘前市国吉中川 原4	駒越組国吉村	1796年 2月15日	国吉村・黒土村	自然石 キリーク
67	桜庭	弘前市桜庭 西沢製鉄所裏	駒越組桜庭村	1796年 3月3日	不明	自然石 円相
68	中畑正林庵	弘前市東目屋中畑	駒越組中畑村	1796年 3月3日	佐山氏・藤川村・ 番館村・川原 平・村市村・太 秋村・田代村・ 中畑邑・国吉邑 ・桜庭村・中野 村	自然石 キリーク 蓮華
69	門外	弘前市門外4丁目 共同墓地	堀越組門外村	1832年	不明	角柱型
70	松木平	弘前市松木平 共同墓地内	堀越組松木平村	1831年 8月9日	松木平村中	丘状頭角柱
71	新岡	岩木町新岡萩流 共同墓地内	駒越組新岡村	1810年 5月29日	新岡村中	自然石 円相 名号 蓮華
72	高岡	岩木町高岡神馬場 共同墓地	駒越組高岡村	1815年 2月20日	高岡村中	丘状頭角柱 ア 蓮華
73	百沢	岩木町百沢笹平 共同墓地内	駒越組百沢村	1789年 12月2日	百沢村・高岡村・ 新法師村	自然石の一部加 工 ア 蓮華
74	葛原	岩木町葛原大柳 葛原橋脇	駒越組葛原村	1800年 2月29日	葛原村・宮地村	自然石 円相 名号 蓮華
75	宮地地藏堂	岩木町宮地沢田	駒越組宮地村	1806年 5月	宮地村 個人9名	自然石 円相 名号 蓮華
76	八幡	岩木町八幡安田	駒越組八幡村	1810年 4月7日	八幡村中	自然石 円相 名号 蓮華
77	一町田	岩木町一町田早 稲田共同墓地内	駒越組一町田村	1800年 2月26日	一町田村・沢山 村中	自然石 円相 名号 蓮華
78	植田	岩木町植田山下 127-58	高杉組植田村	1832年 3月13日	植田村・細越村・ 愛宕村中	自然石 キリーク
79	愛宕神社	岩木町高屋木宮	高杉組高屋村	1810年 4月8日	高屋村中	自然石 円相 名号 蓮華
80	吉祥寺	岩木町高屋福田 80-4	高杉組賀田村	1806年 3月24日	賀田村	自然石 円相 名号 蓮華
81	白沢	西目屋村白沢	駒越組白沢村	1804年 7月	白沢村中	自然石 円相 キリーク 名号

第4表 津軽の飢饉供養塔一覧(4)

No	名称	所在地	藩政区画	造立年月日	造立者	備考
82	田代	西日屋村田代神田 共同墓地	駒越組田代村	1796年 2月15日	田代呂支配中	自然石 キリーク 名号 蓮華
83	吹上	平賀町吹上高畑 共同墓地内	尾崎組吹上村	1817年 4月8日	若者講中	自然石 円相
84	岩館 (蛇塚)	平賀町岩館	尾崎組岩館村	1832年3月	岩館村中	自然石 円相
85	原田	平賀町原田 共同墓地内	尾崎組原田村	不明	三五郎	丘状頭角柱
86	野崎	相馬村黒滝一の川 瀬2共同墓地内	和徳組黒滝村	1795年12月	野崎黒滝村中	自然石 キリーク 蓮華
87	湯口	相馬村湯口ノ 細川共同墓地内	和徳組湯口村	1806年2月	湯口村中	自然石 キリーク 蓮華
88	紙漉沢	相馬村紙漉沢相 馬中学校前	駒越組紙漉沢村	1806年 4月8日	紙漉沢村中	自然石 バク 蓮華
89	坂市	相馬村坂市亀田 共同墓地内	駒越組坂市村	1796年2月	坂市村	自然石 円相 蓮華
90	野田神社	相馬村藤沢	駒越組藤沢村	1808年	藤沢村中	自然石 円相 蓮華
91	藍内	相馬村藍内立石 共同墓地内	駒越組藍内村	1796年3月	藍内村中	自然石 円相 名 号 縁刻地藏二体
92	金龍寺	大鰐町三目内	大鰐組三目内村	不明	個人11名	自然石 円相 名号
93	居士	大鰐町居士日屋沢 共同墓地	大鰐組居士村	1856年	中島作之丞 外崎佐五兵衛	丘状頭角柱「無 縁_親子三人」
94	唐牛	大鰐町唐牛戸井頭 共同墓地	大鰐組唐牛村	1800年4月	唐牛村連中	自然石 キリーク
95	唯称院	碓ヶ関村碓ヶ関 山神堂63	大鰐組碓ヶ関村	1805年 7月16日	唯称院開基者	自然石 圓光 大師600年遠忌
96	実相寺	木造町木造千代 町5-1	木造新田木昨村	1832年7月	川嶋傳兵衛	自然石 題目
97	藤崎新町	藤崎町藤崎横松	藤崎組藤崎村	1803年 3月7日	不明	駒形
98	高田	弘前市外崎5丁目 共同墓地	堀越組外崎村	1832年 7月7日	外崎村・寺内村	自然石
99	善應寺	尾上町高木原富 66	猿賀組高木村	1785年3月	尾上村白澤屋 宇右衛門	有像笠塔婆形
100	小和森	平賀町小和森松村 共同墓地	大光寺組小和森村	1815年	今井嘉右衛門	丘状頭角柱 名号
102	本行寺(2)	弘前市新寺町92	弘前城下新寺町	1832年	加賀□善	丘状頭角柱
103	與樂庵	青森市六枚橋不 浪知	後湯組六枚橋村	1827年	九代目赤平和 治郎	自然石
104	常源寺	弘前市西茂森町 1-5-1	弘前城下茂森町	1833年	竹内榮吉	丘状頭角柱

③天保の飢饉

No	名称	所在地	藩政区画	造立年月日	造立者	備考
7	浄満寺	青森市油川浪返	油川組油川村	1859年 7月11日	石施主大万 勸進 浄満寺27世良快	自然石 円相
54	専求院3	弘前市新町249	弘前城下新町	1841年 3月15日	下町講中 個人27名	自然石 円相 蓮華
63	専修寺2	弘前市東和徳町 8-4	和徳組和徳村	1853年8月	施主個人1名 勸進僧良示	自然石 名号 免願主個人2名
101	苦木	大鰐町苦木野尻 共同墓地	大鰐組苦木村	1847年 3月15日	苦木村中	自然石

二 飢饉供養塔の造営と地域社会

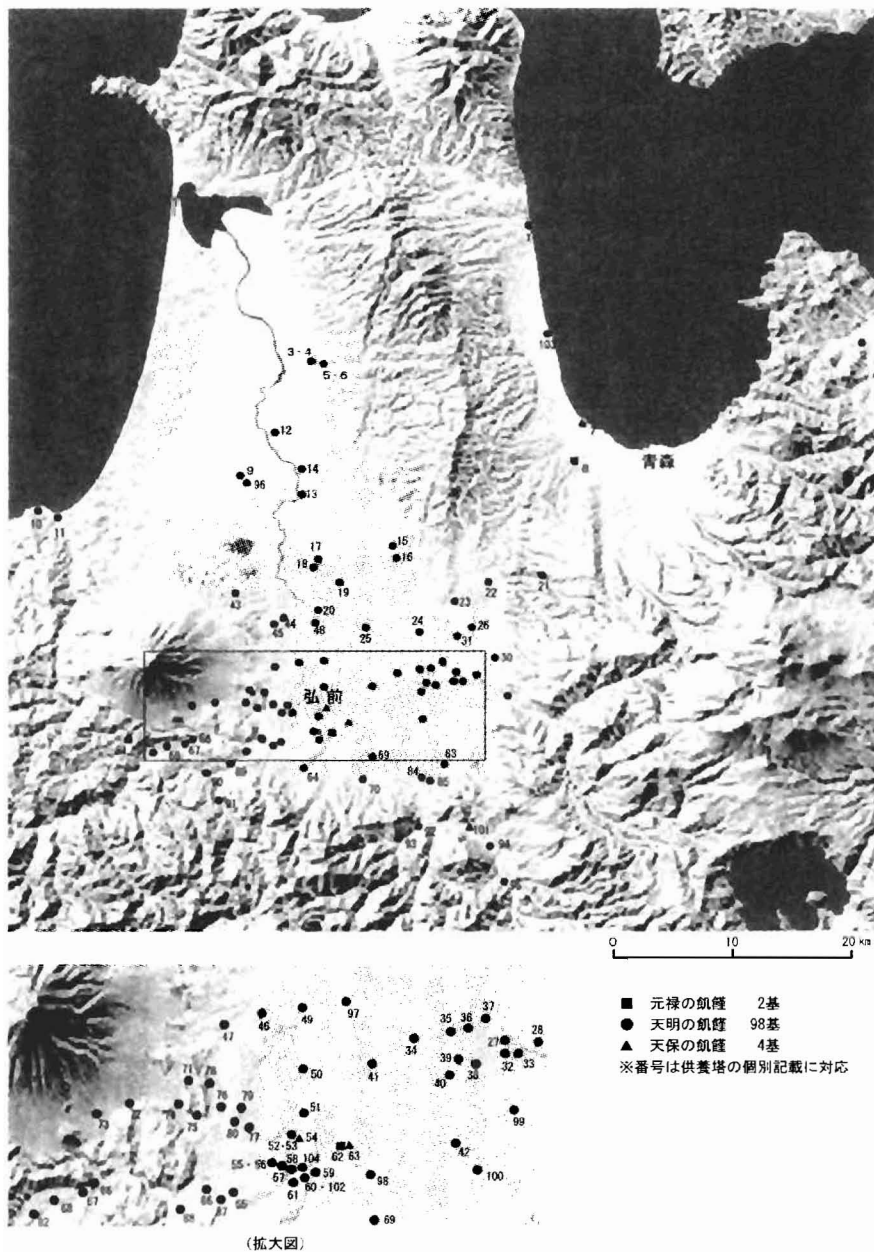
津軽領の飢饉供養塔の位置を点で示した(第1図)。
以下、年代を追って供養塔造営に関わる変化を見ていく。

二― 元禄の飢饉

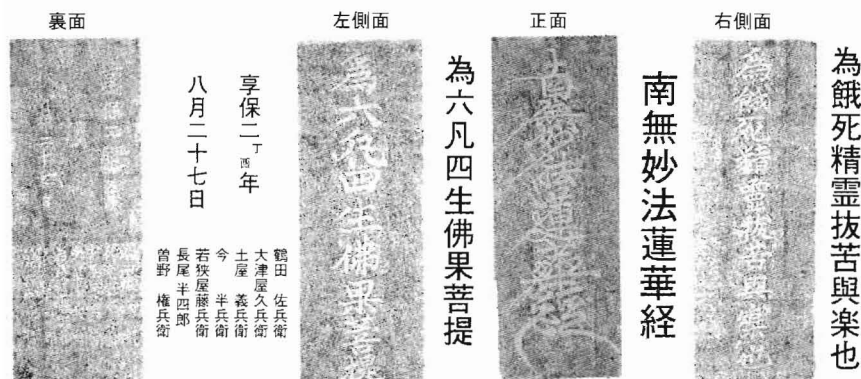
元禄の飢饉に関する供養塔は、城下町弘前と、津軽領九浦の筆頭であった青森町に各一基存在する(第2図)。
弘前和徳専修寺の供養塔は、元禄の飢饉の二三回忌に当たる享保二(一七一七)年、地元有力町人と思われる七名が施主となって建てられた。『国日記』に拠れば、天明の飢饉に際し、天明三(一七八三)年八月二十四日に「極難」者対策として弘前城下和徳町末に「施行小屋」の設置が決定され、同二八日に五間×二十間の建物二棟が完成、九月に楮町の「乞食頭丁介」の敷地内に「非人小屋」が設けられるまでの間、機能していたとされる。
また天保の飢饉の際にも新寺町白道院(現在の遍照寺)・楮町とならんで和徳町郷藏脇に「救助小屋」が取り設けられたという(『天保凶荒録抄』)。元禄の飢饉に際して藩が弘前に設けた「非人小屋」は、当初、瓦ヶ町・猫右衛門町・石渡村の三箇所、後に南横町と東長町裏がこれに加わるが(弘前市史編纂委員会一九六三、青森市史編纂係一九〇九)、和徳は含まれていないため、和徳

専修寺にある元禄の飢饉供養塔と施行小屋との関連は不明である。しかし元禄の飢饉に際し、和徳町に死者を葬るための大きな墓穴が掘られたとされており(『津軽歴史代記類』、専修寺にある元禄の供養塔がその墓穴に関連して建てられたことだけは確実といえよう)。

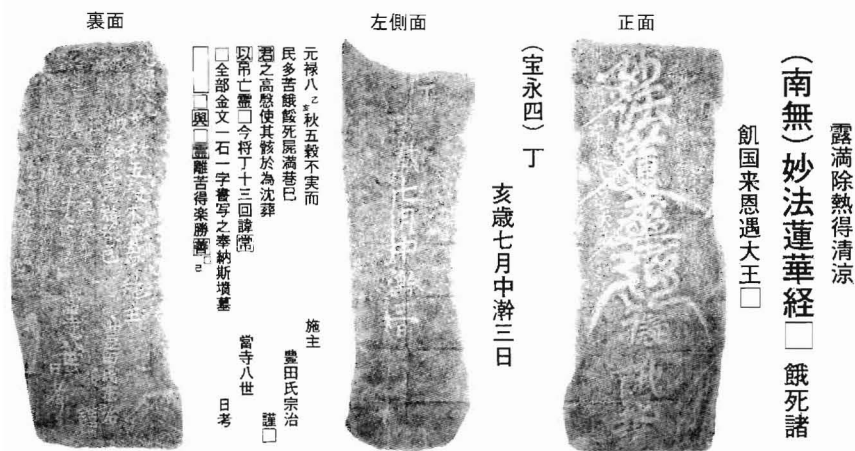
青森本町蓮華寺の供養塔は、元禄の飢饉の十三回忌に当たる宝永四(一七〇七)年、青森横町の有力な商人であり、蓮華寺の檀家であった豊田宗治が施主となり、蓮華寺の八世日考上人の勧進により、飢饉の犠牲者を埋葬した塚の上に、一字二石経の納経碑を兼ねて建てられた。蓮華寺は承応三(一六五四)年、日住上人によって無縁塚の所在地に開基されたとされ(青森市史編纂係前掲)、寺が開かれる以前の段階で既に無縁者の葬送の地であった可能性が高い。『国日記』に拠れば、元禄八(一六九五)年十一月八日に青森の下浜町に四間×四拾間の「渴人小屋」が設けられたとされる。下浜町の渴人小屋の位置については特定できないが、蓮華寺付近の可能性が高い。時代は下って、寛延三(一七五〇)年や天明三(一七八三)年にも蓮華寺裏の無縁塚に「非人小屋」が設けられている(青森市史編纂係前掲)。また、天明の飢饉に際して蓮華寺の日要上人は、餓死者を境内に埋葬・供養したため「飢渴上人」と呼ばれたとされる(江利山一九三三)。



第1図 津軽領における飢饉供養塔の分布



弘前和徳専修寺元禄の飢饉供養塔



青森本町蓮華寺元禄の飢饉供養塔 (現在は青森市内霊園に移設)

第2図 津軽領における元禄の飢饉供養塔

以上、津軽領における元禄の飢饉供養塔は、いずれも、都市に住む富裕な有力町人が施主となり、施行（非人）小屋に隣接して設けられた可能性の高い、無縁者の大規模遺体埋葬場（「イコク穴」）に建てられている。元禄の飢饉の段階では、飢饉の犠牲となった多くの無縁者の供養は、専ら厚志の都市有力町人が担い、天明の飢饉の後に見られる地域共同体主導による供養塔の造立ブームのような万民を挙げての大規模な展開はみられない。

二二 天明の飢饉

前述のように、津軽領では、天明の飢饉以後、主として町や村といった地域共同体により、回忌に当たる年に、自然石を利用した供養塔が盛んに建てられた。地域共同体が施主となっている天明の飢饉供養塔四〇基のうち、単独の村で建てられたものが二八基を占めるが、二箇村共同で造立しているもの六基、三箇村共同のもの五基、一〇箇村が名を連ねるものも一基存在する。

天明の飢饉の供養塔の分布は一樣ではなく、津軽平野の南半部に偏る傾向が見られる。津軽平野の北半部では、金木や五所川原など岩木川沿いに分布が限定される。陸奥湾に面する地域や日本海沿岸部における供養塔の造立は低調である。分布状況を詳しく検討するため、貞享四

（一六八七）年の領内総検地後に遣に替わる行政単位として設けられた組毎に供養塔の数を示した（第3図）。天明の飢饉の供養塔は、津軽平野の南半部のなかでも、とりわけ弘前の城下町とその周辺、すなわち岩木山の東南麓にあたる高杉組や駒越組、浅瀬、石川に沿った田舎組に濃密に分布している。

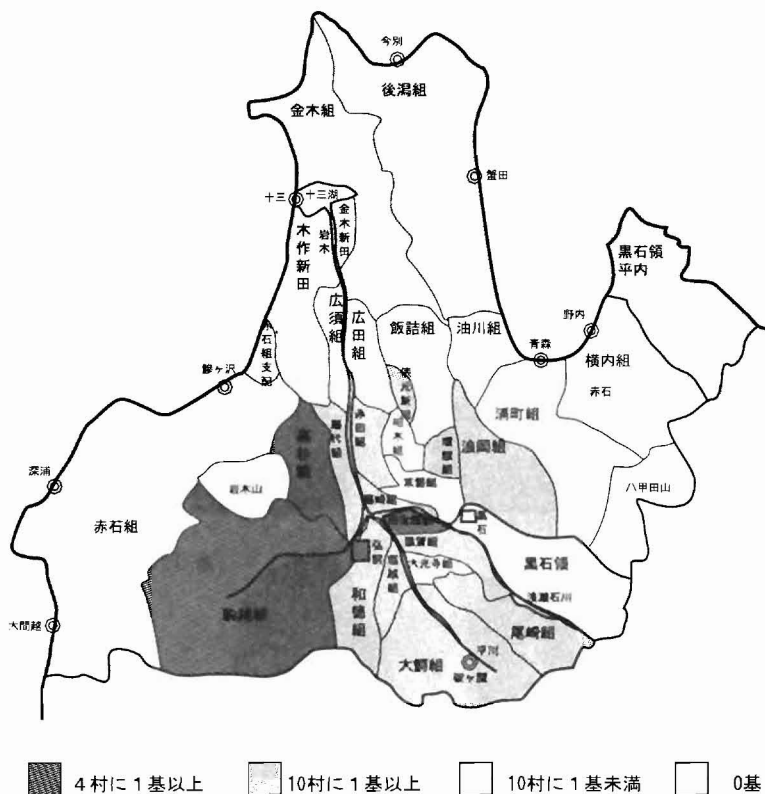
ここでは、天明の飢饉供養塔が集中する二地域と題目講中により建てられた供養塔を取り上げ検討を加える。

【事例A 岩木山東南麓】（第4図）

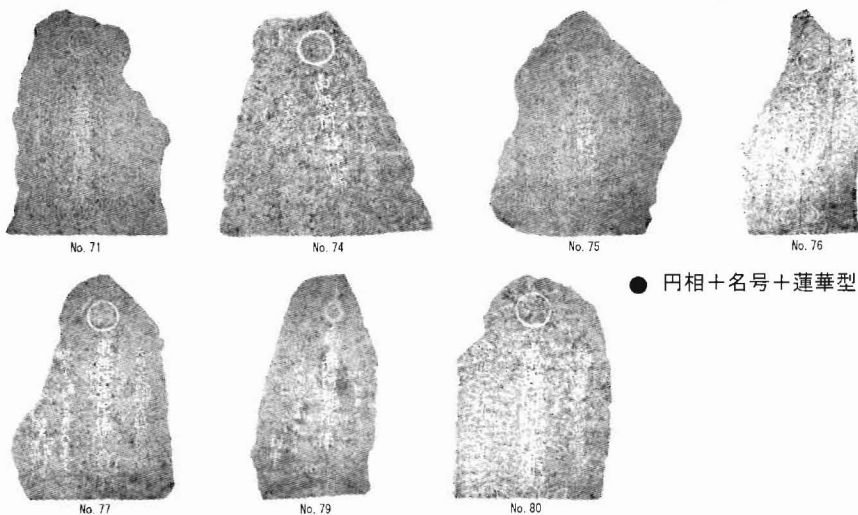
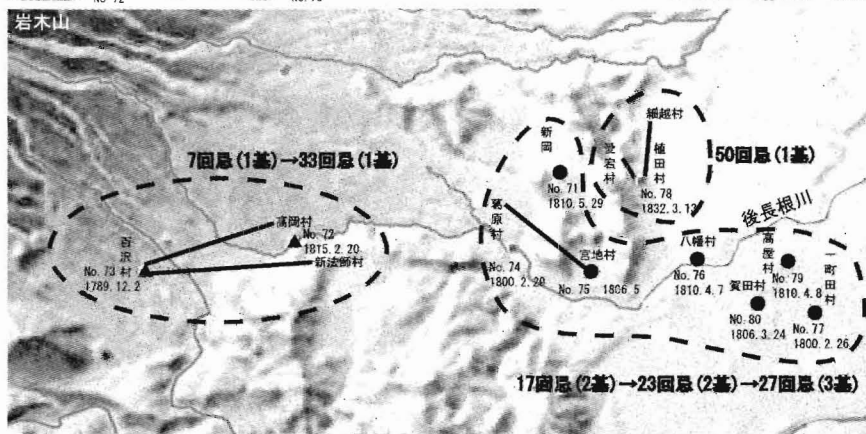
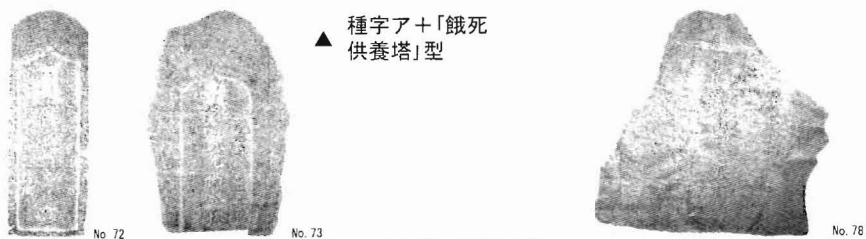
本地域は、岩木山の東南麓、弘前と岩木山神社とを結ぶ百沢街道に沿った地域で、岩木川の支流後長根川が地域を東南流する。駒越組と高杉組に跨るこの地域では、天明の飢饉供養塔十基を確認したが、それらは様式的に3類型に分類でき、分布上も地域的なまとまりを持つ。

最も主流を占めるのが自然石の上部に円相を刻み、その下に名号と蓮華を配置した供養塔で、画一性が極めて高い。このタイプの供養塔は、東は一町田から西は葛原まで東西約五キロメートル、南北約三キロメートルの範囲に7基集中して存在するが、津軽領内でもこの地区にしか見られない。回忌別に見ると、一七回忌に相当するものが一町田と葛原の二基、二三回忌に相当するものが賀田と宮地の二基、二七回忌に相当するものが高屋・八

組・町	村数	天明飢饉供養塔基数	組・町	村数	天明飢饉供養塔基数
弘前城下町	—	11	尾崎組	17	3
駒越組	48	17	赤石組	65	2
田舎館組	19	7	広須組・木作新田	140	2
高杉組	31	8	大光寺組	17	2
藤代組	26	3	常盤組	19	1
和徳組	18	4	広田組	28	2
赤田組	32	4	飯詰組	27	2
藤崎組	16	3	金木組	24	4
猿賀組	19	3	後潟組	41	2
猿元新田	8	1	黒石領(平内)	38	1
大罾組	26	4	柏木組	17	0
浪岡組	22	3	油川組	26	0
増館組	16	2	浦町組	22	0
黒石領	34	4	横内組	44	0
堀越組	17	3	合計	857	98



第3図 津軽領における天明の飢饉供養塔の分布濃度



第4図 岩木山南東麓における天明の飢饉供養塔

幡・新岡の三基となる。これらは葛原の供養塔が葛原村と隣接する宮地村の共同で建てられている他は、基本的には各村を単位として造立されている。この地区では、おそらく隣接する村どうしが互いを意識し合う中で、十七回忌以降、先に建てられた供養塔を真似る形で、飢饉供養塔の造営を次々と展開していったのであろう。

額縁を彫り、その中に種字「ア」（胎藏界大日如来）と「餓死供養塔」の文字を刻んだものは、岩木山南麓でも最も西側に奥まった地区である百沢と高岡に各一基ずつ存在する。百沢の供養塔は七回忌に百沢・高岡・新法師の三箇村の共同で建てられており、高岡の供養塔は三三回忌に高岡村単独で造立されている。なお、この地区は、岩木山神社・百沢寺をはじめ、弘前藩四代藩主津軽信政の霊廟である高照神社など、弘前藩の最重要宗教施設が集中する場所でもある。

上記二種類の供養塔とは異なるタイプのものが、百沢街道から北へやはらずれた植田にある。この供養塔は、五〇回忌に植田村が隣接する細腰村・愛宕村と共同で建てたもので、自然石に種字「キリーク」（阿弥陀如来）と「卯辰両歳飢渴死亡供養塔」の文字を刻んでおり、岩木山東南麓域では造立の最後を飾るにふさわしい最も大

きな飢饉供養塔である。

以上、岩木山東南麓の地域は、天明の飢饉供養塔の在り方から、三地区に分けられた。それぞれの地区は、行政単位である組とは関連性が薄く、むしろ立地環境の類似性に起因する地縁的まとまりとして理解可能である。

【事例B 岩木川上流域・相馬川流域】（第5図）

岩木川上流域ならびにその支流である相馬川流域は、前述の岩木山東南麓域とならんで、津軽領で天明の飢饉供養塔が最も集中する地域である。ここでは岩木川上流域を、岩木川によって開折された、国吉から川原平にいたる長さ約一七キロメートルの幅狭の谷底平地部として捉えるが、この地域には五基の天明の飢饉供養塔が存在する。同じく相馬川流域では、岩木川との合流点に近い紙漉沢から最も上流の村落である藍内まで、全長約七キロメートルの幅狭の谷底平地部に、四基の天明の飢饉供養塔が存在する。

岩木川上流域では、飢饉供養塔が分布するのは、平野部が比較的広くなる田代までで、それより上流部では発見されていない。この地域では、天明の飢饉の二三回忌に当たる寛政八（一七九六）年に四基の供養塔が集中して建てられている。しかも国吉と田代は二月十五日、桜



第5図 岩木川上流域・相馬川流域における天明の飢饉供養塔

庭と中畑は三月三日と、同じ日に二箇所て供養塔が造立されている点が注目される。このなかで最も規模が大きい中畑の正林庵にある供養塔は、いずれも岩木川上流域に属する藤川・番館・川原平・村市・大秋・田代・中畑・国吉・桜庭・中野の一〇箇村と一名の個人（佐山氏）が施主となって建てられている。中畑の飢饉供養塔の施主となっている村のなかでは下流に位置する国吉・桜庭・田代の三箇村は、前述のように中畑の飢饉供養塔が建てられたのと同じ年に、それぞれ個別に各村域内にも飢饉供養塔を造立している。これは、より上流の村市・藤川・川原平で、各村内に独自の供養塔が造営されないのと対照的な現象である。中畑正林庵の飢饉供養塔の施主に名を連ねる一〇箇村のうち、比較的下流に位置する国吉・黒土・桜庭・中畑・田代周辺には岩木川沿いに耕作可能な平地がある程度広がっているのに対して、上流の大秋・村市・藤川・川原平は傾斜地が目立ち、水田稲作には極めて不向きな場所である。事実、『平山日記』では、国吉・黒土・桜庭・中畑・田代の村位が上であるのに対して、大秋・村市・藤川・川原平は下と評価されている。「駒越組大秋村図」（西沢一九七〇）によれば、天明の飢饉以前、大秋村には六八軒の家があったが、飢饉後には三四軒となり、中畑正林庵の飢饉供養塔が建てられた寛政八年には僅か一八軒にまで減少している。この

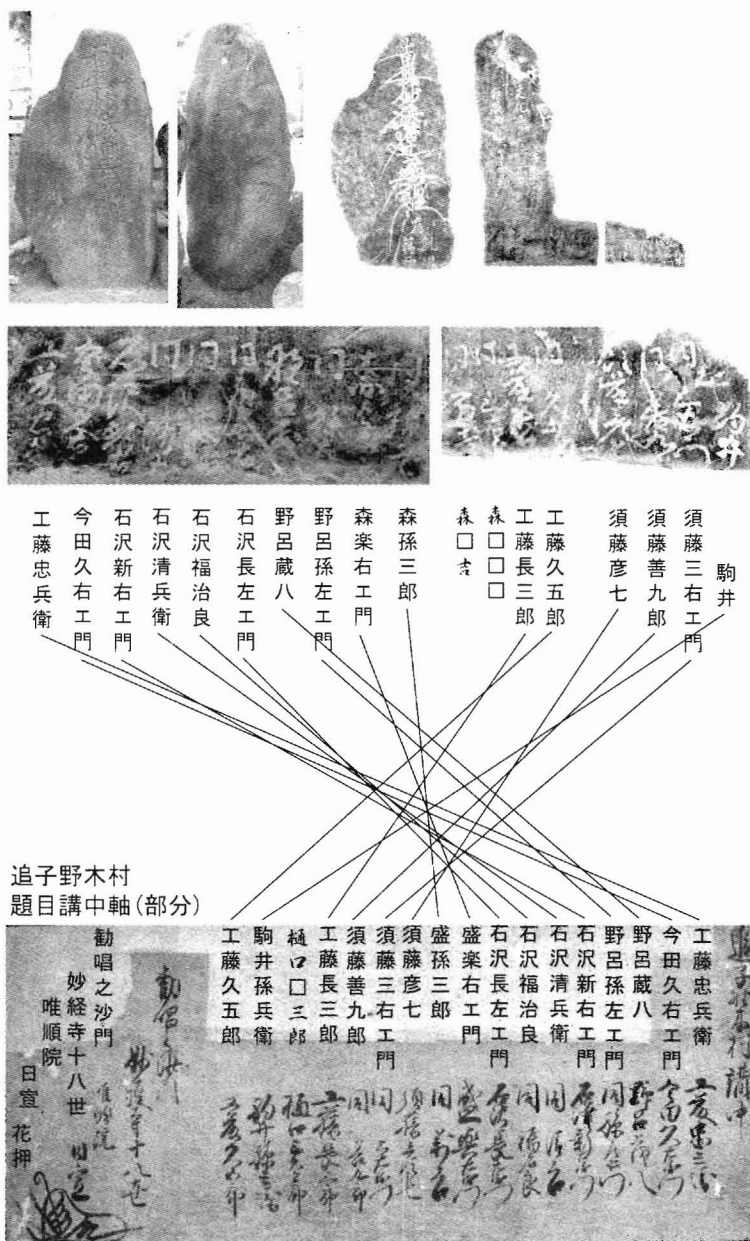
史料から判るように、大秋村は、天明の飢饉の一三回忌に、村単独で供養塔を建てられるような状況にはない。おそらく、村位が下と評価された村市・藤川・川原平などの村も同じような状況であったと推察される。

この地域の中では経済基盤が比較的強い国吉・桜庭・田代の三箇村は、中畑正林庵の供養塔に名を連ねる一方で、同時に各村域内に独自の供養塔を造立し得た。反対に経済基盤が弱く、独自に供養塔を建てただけの余力を持たない最上流部の村々は、目屋全域を挙げて営まれた中畑正林庵の飢饉供養塔に名を連ねることで、精神面でも飢饉を克服し、地域共同体の再生を果たしたことを対外的に表明したのではなからうか。

中畑正林庵の天明飢饉供養塔は、中世以来「目屋」と呼ばれてきた岩木川上流域に属する村々が、十八世紀末の段階でも地域的なまとまりとして実際に機能していたことを意味する。中畑正林庵では、明治十九（一八八六）年にも、金山無竟住職により天明の飢饉の百回忌と天保の飢饉の五〇回忌を兼ねた法要が営まれている（西沢前掲）。近代以降も目屋に住む人々の間では、正林庵が飢饉供養の場であるとの認識が維持されていたのである。

【事例C 追子野木村柳川の天明飢饉供養塔】（第6図）

本供養塔は、黒石領に接する、猿賀組追子野木村にある。本供養塔は、天明の飢饉の二三回忌に当たる文化三



第 6 図 題目講により建てられた旧追子野木村柳川の天明の飢饉供養塔

(一八〇六)年三月、追子野木村の題目講中の人々によって建てられた。現在も地元に残る題目講の軸によれば、当時、追子野木村の題目講は、黒石妙経寺の十八世日宣上人が勧唱を務めていた。同じ追子野木村宮崎の旧黒石街道沿いには、文化六(一八〇九)年十一月、日宣が「国中卯辰兩年餓死精霊廿七回忌追善」のために建てた、道標を兼ねた供養塔が存在する(第2表32)。日宣は、黒石妙経寺に移る以前、五所川原寺町にあった法永寺の十二世住職を務めており、そこでも「郡中卯辰凶災餓死亡霊廿三回忌」の供養塔を建てている(第1表14)。

第1〜4表から判るように、飢饉供養塔に題目を刻んだものや日蓮上人の五五〇遠忌碑を兼ねたものは、黒石から田舎館周辺に多く見られる。うち、黒石城下元町と田舎館組畑中の供養塔は、それぞれ地元の講中が施主となっている。これらは、黒石妙経寺の日宣によって展開された飢饉供養を組み込んだ宗教活動の現れであろう。津軽領の天明飢饉供養塔九八基のうち八基は、碑文から何らかの講中により建てられたことが判る。村や町といった地域共同体には及ばないものの、飢饉供養塔造立の上で、既存の宗教的・経済的・社会的集団組織の果たした役割は無視できない。

二一三 天保の飢饉

津軽領における天保の飢饉の供養塔は四基と、天明の飢饉供養塔に比べ非常に少ない。その理由を考える上で重要とおもわれるのが、嘉永六(一八五三)年に建てられた和徳専修寺の供養塔である(第7図)。

弘前市の指定文化財である和徳専修寺天保飢饉の供養塔は、高さ三・三六メートル、幅二・八メートル、厚さ一・一八メートルの北奥最大の飢饉供養塔である。本供養塔は、工藤慶助と松嶋伊兵衛の発願により、弘前の大商人三國屋久左衛門こと工藤惟徳以下四名を施主に、和徳町の若者講中と三名の人物が世話人を務めて、弘前周辺の四〇町村六三九〇名の手伝いにより造立された。手伝いを出した町村は、北は平川を超えた羽州街道沿いの藤崎村から、南は津軽平野の南端に位置する大鰐組石川村まで、東は尾崎村から西は岩木川の上流駒越組堰根村まで、南北約一〇キロメートル、東西約一八キロメートルの範囲に及ぶ。手伝いの数は、和徳村の最大五〇〇名から新山村・尾崎村・紙漉澤村・新里村の各五〇名まで幅があり、組別では、和徳組の二五六〇名を筆頭に、以下堀越組一三八〇名、弘前城下町一〇〇〇名、猿賀組四四〇名、藤代組・大光寺組各三〇〇名、駒越組二二〇名、高杉組二〇〇名、藤崎組八〇名、大鰐組七〇名となる。

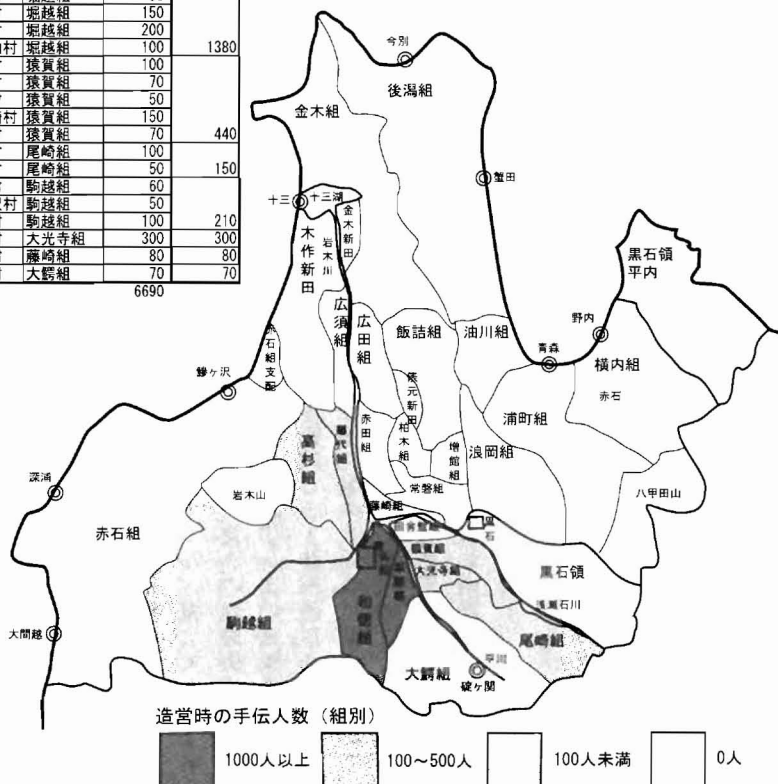
町村名	組名	人数	小計
東長町	弘前城下町	100	1000
茂森新町	弘前城下町	300	
和徳町	弘前城下町	400	
松町若者	弘前城下町	200	
和徳村	和徳組	500	
高崎村	和徳組	80	
堅田村	和徳組	100	
撫牛子村	和徳組	400	
大久保村	和徳組	400	
津軽野村	和徳組	80	
百田村	和徳組	100	2560
清野袋村	和徳組	100	
小沢村	和徳組	200	
鹿戸村	和徳組	300	
湯口村	和徳組	200	
黒瀬村	和徳組	100	
外瀬村	藤代組	300	
高屋村	高杉組	200	200
福村	堀越組	200	
外崎村	堀越組	200	
小比内村	堀越組	200	
高田村	堀越組	200	
川合村	堀越組	80	
新里村	堀越組	50	
境塚村	堀越組	150	
寺内村	堀越組	200	1380
小栗山村	堀越組	100	
日沼村	猿賀組	100	
大森村	猿賀組	70	
新山村	猿賀組	50	
八幡崎村	猿賀組	150	
蒲田村	猿賀組	70	440
新屋村	尾崎組	100	
尾崎村	尾崎組	50	
堰根村	駒越組	60	
紙漕沢村	駒越組	50	
五所村	駒越組	100	
杉倉村	大光寺組	300	
藤崎村	藤崎組	80	
石川村	大野組	70	
		6690	



正面

右側面

裏面



第7図 弘前和徳専修寺の天保の飢饉供養塔

天明の飢饉に関しては、先述のように中畑正林庵の飢饉供養塔が目屋地域一〇箇村の共同で建てられてはいるものの、それは例外に属し、他は全て三箇村以下で造立されていた。違いは、単に供養塔の造立に加わった村の数だけではない。より根本的な違いは、天明の飢饉供養塔の場合、町村という地域共同体自体が施主であったのに対して、和徳専修寺の天保飢饉供養塔は、地元の有力量者の呼びかけで、大商人が資金を提供し、それに答える形で、広範囲から労働力を提供すべく人が集まっている点にある。すなわち、和徳専修寺の天保飢饉供養塔の場合、町村毎に手伝い人数が集計され、その数が碑面には刻まれてはいるものの、町や村といった地域共同体が造立に何らかの役割を果たしているわけではない。地域共同体が前面に出ることはなく、また直接行政が関与することもない。施主である弘前の大商人からなにがしかの報酬は受けたかも知れないが、基本的には供養に参加したいと願う多くの人々の姿を読みとることができよう。専修寺以外の他の三基の天明飢饉供養塔のうち、村を施主としているのは大鰐苦木例だけで、油川淨満寺例は大万という個人が、弘前専求院例は下町講中二七名が施主である。天保の飢饉供養塔造営に際して、地域共同体が主体的な役割を果たしていないことは明白であろう。

三 結 語

以上、北奥津軽地方の飢饉供養塔の造営の在り方を、対象となる飢饉毎に比較して述べてきた。

元禄の飢饉供養塔は、城下町弘前と領内随一の港町青森という、都市に住む富裕な有力町人により、施行（非人）小屋に隣接して設けられた可能性の高い、無縁者の大規模遺体埋葬場に建てられていた。

元禄の飢饉の際、津軽領では、元禄八（一六九五）年の八月末頃から餓死者が発生するようになり、翌九年八月迄の間に十万余の餓死者が出たという（『津軽歴代記類』所収「工藤家記」）。元禄の飢饉による津軽領での人的被害は、餓死者と疫死者を合わせ、領民の三分の一にも達すると言われる（長谷川二〇〇四）。その被害は後の天明の飢饉同様、領内全域に及んでいたと考えられるが、農村部に元禄の飢饉の供養塔は存在せず、地域共同体によって建てられた供養塔も見当たらない。飢饉の際の対策同様、飢饉後の犠牲者の供養も、都市部を舞台に、専ら藩や有力町人の手に委ねられていた感がある。元禄の飢饉の段階では、地域共同体が前面に出て、主体的な役割を果たすことはなかったのではなからうか。

天明の飢饉による津軽領の人的被害は、餓死者・疫死

者を合わせ、八万余（『弘前藩庁日記』）から一三万余（『天明凶歳日記』）前後で、その数は領内人口約二五万人の半数から三分の一に相当する。この数には、他国へ逃れた難民（『天明凶歳日記』では八万余人とされる）は含まれておらず、極度の人口減少により、津軽領の地域共同体が壊滅的な状況に陥ったことは確かであろう。

天明の飢饉供養塔は、村や町といった地域共同体により建てられたものが最も多く、宗教的・経済的・社会的集団組織である講によるものがこれに次ぐ。いずれも直接飢饉の犠牲者を出した階層の人々が集団で造立しており、その点が元禄の飢饉供養塔と大きく異なる。また、飢饉の被害が大きく、人口の減少が著しかったと思われる地域には、歴史的・地理的に結びつきの強い複数の村が共同で建てた供養塔も存在する。岩木山東南麓域で見られたように、地域によっては、村どうしがあたかも張り合うが如く、相次いで供養塔を造立する現象も起きた。飢饉供養塔は、地域共同体再生の象徴という役目を担っていたのではなからうか。

天保の飢饉による津軽領の人的被害は、天保三（一八三二）年から九年までの七年間で、死者三万五六一六人、他領への逃散者四万七〇四三人と記録された（『津軽歴代記類』）。領内に残る天保の飢饉に関する供養塔は、四

基に過ぎず、地域共同体が施主となって建てられたものは一基のみである。このなかで、弘前周辺の四〇町村六三九〇名の手伝いにより造立された、弘前和徳専修寺の供養塔は、村や講といった既存の組織によらず、飢饉の犠牲者の供養を目的として、従来の集团的枠組みを大きく越えた「運動」が展開したことを示すモニュメントとして重要である。幕末には、飢饉の犠牲者の供養という精神的な部分に限って言えば、もはや地域共同体は十分な機能を果たしていない。そこには、ある目的のために、人々がヨコに連繋する新たな動きが見て取れよう。今後、全国各地の飢饉供養塔を集成し、その検討を行うなかで、こうした変化が北奥社会に特有な現象なのか、全国レベルで一般化できるのか見極める必要がある。

〈引用・参考文献〉

青森県文化財保護協会（一九八六）『永禄日記』みちのく双書第一集

青森県文化財保護協会（一九五九）『津軽歴代記類』上 みちのく双書第七集

青森県文化財保護協会（一九五九）『津軽歴代記類』下 みちのく双書第八集

青森県文化財保護協会（一九六七）『平山日記』みちのく双書第

二二集

青森県立図書館・青森県叢書刊行会（一九五四）『南部・津軽藩飢

饉史料』青森県叢書第七編

青森市史編纂係（一九〇九）『青森市沿革史』上巻・中巻 青森市

役所

荒川秀俊（一九七九）『飢饉』教育社歴史新書（日本史）九四

江利山義顯（一九三三）『青森の飢渴和尚』郷土誌うとう 第四

号 三八・三九頁

葛西松四郎（一九八〇）『津軽ケガシ物語』

菊池勇夫（一九九一）『近世の飢饉に関する民衆生活史的研究』

一九九〇年度科学研究費補助金一般研究（C）研究成果報告書

菊池勇夫（一九九四）『飢饉の社会史』校倉書房

菊池勇夫（二〇〇〇）『飢饉 飢えと食の日本史』集英社新書

菊池勇夫（二〇〇三）『飢饉から読む近世社会』校倉書房

佐藤光男（二〇〇三）『津軽地方の天明の飢饉供養塔について』

『東奥文化』第七四号 四七～六二頁 青森県文化財保護協会

首藤伸夫・古山豊ほか（二〇〇三）『津波の対策・復興・伝承』

『ドキュメント災害史一七・三・二〇〇三』一〇六～一二頁

国立歴史民俗博物館

関根達人（二〇〇四）『津軽の飢饉供養塔』弘前大学人文学部文

化財論ゼミナール調査報告Ⅲ

関根達人編（二〇〇五）『下北・南部の飢饉供養塔 補遺津軽の飢

饉供養塔』弘前大学人文学部文化財論ゼミナール調査報告Ⅳ

千葉県立房総博物館（二〇〇三）『地震と津波』平成十五年度企画

展図録

西沢安太郎（一九七〇）『ふるさと西目屋』西目屋村

長谷川成一（二〇〇四）『日本歴史叢書弘前藩』吉川弘文館

羽鳥徳太郎（一九七五a）『一九十九里浜における元禄十六年（一七

〇三年）津波の供養碑』『地震』第二輯第二八巻第一号 九八～

一〇一頁

羽鳥徳太郎（一九七五b）『元禄・大正関東地震津波の各地の石碑

・言い伝え』『東京大学地震研究所彙報』第五〇号第四冊 三八

五～三九五頁

羽鳥徳太郎（一九七六）『南房総における宝永・安政東海地震の津

波調査』『東京大学地震研究所彙報』第五一号第二冊 六三～八

一頁

羽鳥徳太郎（一九七八a）『高知・徳島における慶長・宝永・安政

南海道津波の記念碑』『東京大学地震研究所彙報』第五三号第二

冊 四二三～四四五頁

羽鳥徳太郎（一九七八b）『三重県沿岸における宝永・安政東海地

震の津波調査』『東京大学地震研究所彙報』第五三号第四冊 一

一九一～二二五頁

羽鳥徳太郎（一九七九a）『九十九里浜における延宝（一六七七年）

・元禄（一七〇三年）津波の挙動 津波供養碑の調査から』

『東京大学地震研究所彙報』第五四号第一冊 一四七～一五九

頁

羽鳥徳太郎（一九七九b）『北海道渡島大島津波（一七四一年）の

供養碑』『東京大学地震研究所彙報』第五四号第二冊 三四三～

三五〇頁

羽鳥徳太郎（一九八〇）「大阪府・和歌山県沿岸における宝永・安政南海道津波の調査 久し札・入野・土佐清水の津波の高さ」『東京大学地震研究所彙報』第五五号第二冊 五〇五～五三五頁

羽鳥徳太郎（一九八一）「高知県南西部の宝永・安政南海道津波調査」『東京大学地震研究所彙報』第五六卷第三冊 五四七～五七〇頁

○頁

弘前市史編纂委員会（一九六三）『弘前市史』藩政編

弘前大学国史研究会（一九七七）『津軽史事典』名著出版

三浦行一（一九八三）「津軽のいしづみ（六）餓死供養塔（A）」『鵬桜会誌』第二九号 五六～五九頁 弘前大学医学部同窓会

三浦行一（一九八四）「津軽のいしづみ（六）餓死供養塔（B）」『鵬桜会誌』第三〇号 四三～四六頁 弘前大学医学部同窓会

三原良吉（一九六二）「飢饉金石文」『宮城縣史』二二一（災害）

二二三～二九四頁